

商工經濟研究

第一卷 第四號

(大正十五年
七月五日發行)

智識階級の就職難と教育

——末弘博士の所論に對する批評——

大 泉 行 雄

雜誌「企業と社會」六月號の批評欄で極めて簡單乍ら末弘博士の所論に對する筆者の省察を示して置きましたが、茲に再び執筆の機會を與へられましたので、同じ趣旨をば、稍々詳論致しまして大方の御考察を煩したいと思ひます。

法學博士、末弘嚴太郎氏は、雜誌「改造」の本年三月號に「子弟の職業撰擇に就て」と題する一文を掲げられて、現在、衆目を惹きつつある智識階級の失業問題及び就職難と、學校教育との關係を論せられ、鋭い觀察を下されました。

勞働者階級の失業問題は、歐洲戰爭の終結と共に世界の各國を見舞ふた、經濟的、社會的難問題の

一つであつて、各國の爲政者、及び識者が尠なからず頭を悩ましてゐるものであり、従つて又之に對する各種の社會社政の方策が著るしく擡頭し來つた所以であります。然るに、斯の様な勞働者の失業問題が今尙解決を見ず、社會の禍根を爲して居る今日、更に困難なる問題が我々の面前に現はれて來ました。謂ふ所の智識階級の失業問題、殊に一定學業終了者の職業獲得難が即ち之であつて、大戰後襲來して來た經濟界の不況と共に、其の脅威を弱めず、幾多の學校卒業者を悩まして居るのであります。従つて末弘博士の右の一文は、全く時機に投じた寄與であると申さねばならないのであります。殊に博士は、中央職業紹介委員會の委員と言ふ、職業問題とは直接に關係ある立場にあられるので、其の觀察は極めて適切なものであり、従つて單に此の文の筆者のみならず、心ある一般社會の人士、特に子弟を擁する父兄及び職業を求めんとする子弟自身にとつて、考ふべき何物かを與へたに相違ありませぬ。唯、筆者の不敏なるが爲めか、博士の所論には敬服する所多いにも不拘、猶飽き足らぬ節無しと致しませぬ故、茲に博士の所説を改めて伺ひ、讀者をば、筆者の疑問とする所まで誘はふとする所以であります。先づ行論の順序と致しまして、博士の所論の要旨を明かにし、次いで筆者の考察を開陳して行きたいと思ひます。

末弘博士に従へば、大學、専門學校等に學ぶ學生が、其の就學中から、早くも就職問題に就て苦慮し、學修の態度も亦之に依つて左右せられつつあるを觀る時「教育制度の根本問題」として考慮しなければならぬ事情が多く存在すると言はれます。

扱て、此の問題に就て、第一に考察しなければならないことは、父兄が子弟の職業撰擇上に有つてゐる權利と責任との範圍如何と云ふ問題であります。吾が國に於ては、今尙、子弟をば親の所有物の様に考へ、職業撰擇に就ても、子弟の意思を全く無視して、父兄一個の專斷に依ることが少くありません。斯くの如きは、往々にして、子弟の一生を誤ると共に、又家庭的悲劇を惹き起す怖れのあるものであるから、「此の點に關する社會一般の思想に對して、其の根本的變革を切望せざるを得ない」と申されます。蓋し博士の考へによりますと、人には各々其の特色とする所があり、社會は其の成員に就て、適材を適所に配し、各自の長所をば發揮せしむることによつてのみ、社會の進歩と繁榮とを圖ることが能ざるからであります。であるから、父兄が子弟をば、全然放任主義に養育することは宜しく無いこと勿論であるけれども、然し子弟の意思は第一に尊重しなければならないのであります。そこで次の様な博士の結論が參ります「父兄は宜しく平素より一々子弟の性格能力等に就て、仔細なる觀察を怠らざると同時に、各種職業に就て、正しき理解を得ることを務め、子弟の職業撰擇に就ては先づ本人の意思に重きを置いた上、虚心以て親切なる相談相手となるが如き態度を、採らねばならぬ

い」と。(三月號改造)

博士が擧げられる考察の第二點は、子弟の養育教養を以て、一種の投資事業の如くに考へることの誤を正さんとする所に在ります。而して、此の謬見から、子弟の職業撰擇上にも、悲しむべき結果を齎らすことの多い事は、最も注意しなければならぬ點であると申されるのであります。

子弟の職業撰擇上、其の父兄が採るべき正當なる態度は右の通りであります。最後に最も重要であると博士自らも考へられる事は、智識階級の失業問題及び就職難と職業撰擇問題との關係であります。博士は、此の點に觀察を加へて、次の如くに論せられます。智識階級の失業問題乃至就職難は、今日吾々の等しく悩みつつある社會病であります。其の原因として考へられるのは、一方に於て、經濟界の不振に因ること勿論であります。然し「それよりも、一層根本的原因として考へねばならぬのは、明治此の方一般に行はれ來りたる教育思想の根本的誤謬である」と博士は斷せられます。蓋し、博士によれば、從來、吾が國の教育なるものは、成功出世の手段と考へられ、従つて「國家有爲の材」の養成と言ふことばかりに熱中して來たものであります。之は教育の本位を根本的に誤解した思想と申さねばなりません。教育の本位は「人格の完成」に存します。職業や地位の如何を問はず「人間一人前として、何處に出しても恥しからぬだけの智識と教養とを備へ、又國民一人前として何處に出しても退けを取らぬだけの見識と實力とを有つて居りさへすれば、我々は人として又國民と

して何等恥づる所なき立派な人格者である。而して教育は、實に斯くの如き人間として、國民として立派な一人前の資格を作り與へることに本位を置かねばならないのであつて、國家教育制度も亦實にこの基礎の上に築かれねばならないこと素より言ふを俟たない」のであります。(三月號改造)

智識階級の失業問題及び就職難と、學校教育との關係に就て、未弘博士が説かれる所は、凡そ右に説述した所で之を盡したと考へられます。之を約言致しませば、社會の一般的教育思想を改めて父兄並に子弟自身が、從來の誤れる出世主義、成功主義の迷夢より醒め、教育の本義を體認することが、智識階級の失業及び就職難ある今日、最大の急務であると申さるるに在ります。

三

以上を以て大體、未弘博士の説かれる所を紹述し得たと信じますから、以下、其の各項に關して筆者の考察と批評とを披瀝して參ります。

博士が、子弟に對する父兄の權利と責任とを明かにせられて居る點、及び、教育の本義を釋明せられて居る點に就ては、筆者も其の趣旨に全く賛意を表するものであります。同時に、此の様な改められたる思想が、一日も早く一般的輿論として行はるるに至ることを渴仰すること、敢て人後に落つるものではないと信じて居ります。

唯、親が其の子弟をば所有物視する思想は、博士の言はるる如く、今尙存在するに疑無いのでありますけれども、筆者は之が甚だしく、其の勢力を失ひつつありと確信するものであります。最近に於て吾々は、家庭に生ずる新舊思想の衝突と云ふ社會的現象を屢々耳にし、又實見もするのであります。此の事實は、一面に於て、舊思想の存在することを示すと共に、他面に於て、傳統的なる親權萬能主義が、次第に其の地歩を奪はれつつあることを示すものとも觀られます。少くとも、舊來の思想に對立すべき新勢力が勃興しつつあることを實證するものであると考へ得らるのであります。従つて、家庭に於けるデモクラツシーは、假令、吾が國の様な特別な鞞帶を有つて居る家族制度の國に於ても、今後益々有力となることが自然の勢ひであると申されます。であるから、此の點に關しては寧ろ樂觀的立場を探ることが能きると私は斷言するものであります。

第二の點を考へます。子弟の教養を以て、投資事業の一種と看做す思想は、博士が指摘せらるる如く甚だしい謬見であります。而して此の誤れる思想は、吾が國に於て、強大なる根を張つて居る一般的思想であると筆者も考へます。けれども私は、之に對して、斯くの如き結果を誘致するに至つた必然的事情までも立入つて考へねばならないと思ふものであります。或る誤つた結果が生じた場合それを發生せしめたことに就て二個の點から原因が考へられます。一つは環境とは關係なく、獨立に生じた場合であります。即ち偶發性のもので、例へば爲政者の思想そのものが淺薄なために弊惡を齎らす

場合など之であります。此の様な場合には、其の考へ方をさへ改めれば弊惡は自ら消滅せしめらるることとなります。其の二は、誤謬が、單純に誤謬をなした人だけの罪に歸することができない場合、換言すれば、環境が自ら人々をして、其の誤謬を爲さしめる様に出來上つてゐる場合であります。かゝる場合には、一方に於ては誤謬をなした人の思想を改めると共に、他方に於ては、その誘因を形造つてゐる環境其のものに向つても方策を施して行かねばならないのであります。今、謬想が社會的なものであるとすれば、環境は社會的環境即ち種々なる社會狀態、或は經濟狀態に外なりません。之等の狀態が禍根となつて謬想を誘導助成して居る場合には、社會狀態や經濟狀態に向つても改善を加へて行かなくては、完全を期することが不可能であります。

扱て、子弟の教養を目して投資事業の如く考へ之に依つて父兄が將來に收益を得やうとする誤つた思想は、私によれば、以上叙べた二種の謬見の中の後者に屬するものであります。即ち、吾が國の一般人に斯る誤謬を抱かせて居るには、必然的な外部的事情が存在すると考へられるのであります。然らば、其の事情とは何であるかと言へば筆者の考へによる時少くとも二つあります。一つは、吾が國に傳統的なる家族制度の慣習であり、其の二は、經濟的生活程度の問題之であります。前者の傳統的なる家族制度の慣習と申すのは、吾が國に於て家系が特に重要視せられて居ることに由來するもので言はば家系主義とも言ふべきものであります。其の結果、時には親が、自己の個人的欲望及び悅樂を

犠牲としても、子女を育成教養することをば義務と考ふると共に、子女は又、成人の後、親の保護養老に勉めるものであつて、此の連続的交互關係は、家系又は家門の維持發展といふ思想に淵源するものであります。之は歴史的經過によつて形成せられたものであつて、大にしては吾が國の皇統が連綿として窮りなく、強き祖先崇拜の思想の上に築かれて居る如く、小にしては又、一般人の家庭に於ても同じ歴史的經過と思想とを認め得るのであります。斯くの如き家系主義に動かさるる場合には、親が子弟を教養するに當り、家系維持のための犠牲を竭くすが常であるから、従つて又、親が其の活動力を失つた老後の保障を子に求めるが如き期待感を抱くのは一面當然と言はねばならないのであります。

後者の經濟的生活程度と言ふのは、吾が國に於て國民の生活程度が一般に低く、家庭内に經濟的餘裕の極めて少いことを意味するのであります。近頃、家計調査のことが頻りに唱へられ、近い内にその實際調査に着手するとか聞いて居ります。その結果が發表せられれば、吾が國民の經濟的生活程度が、一層はつきりして參るのですが茲には夫れを採用する術を持ちません。けれども種々なる統計資料によりまして、吾が國の人口と國富、又人口と國民所得との間に、非常な大きい開きのあることは察せられます。今その二、三の例を示して見ます――

大藏省の調べによりますと、大戰後に於ける世界の主要國に於ける國民所得の一人宛平均所得額は

大體左の如くであります。

又、米國バンカーストランスト會社の一九二三年(大正十二年)に於ける、世界主要國の國富一人宛平均額は次の如くであります。

米 國	五六五円	英 國	四二六円	佛 國	三六〇円
白 國	二五七	獨 逸	二三〇	伊 國	一七〇
羅馬尼	一一八	露 國	八五	日 本	七一
米 國	四、一九四円	英 國	二、九八七円	佛 國	二、九七八円
獨 逸	一、八〇八	白 國	一、四三二	羅馬尼	一、一七九
伊 國	一、〇六五	露 國	六八三	日 本	五三七

次に日本勸業銀行の調べによる、各國の貯金高を見るに一九二二年末に於て左の如く示されて居ります。

米 國	六五七円	(貯金者一人當平均額)	(人口百ニ付貯金者ノ割合)
伊 國	二〇〇		一人
白 國	一九五		
英 國	一四八		
佛 國	一四七		
日 本	三九		

貯金局より昨年出ました「貯金局統計年報」によりますと、吾國に於ける郵便貯金預金者數は、大正十三年末に於て、約三千萬人。總人口八千二百萬人に比し約三割五分に當ります。而して其の預金額の一人當平均貯金額は、三十六圓九十錢であります。英國は日本と似て、全人口の約三割八分が郵便貯金を致して居りますが、其の一人當平均貯金額は百四十四圓三十七錢と報告せられて居ります。

之等によりまして、日本人の經濟生活に餘裕の少いと言ふことが伺はれると思ひます。

それ故子弟に高等教育を授けんとすることは容易な業ではなく、若し敢てなす時は、それが爲めに多くの犠牲を拂はねばならないのであります。子弟に相當なる教養費を供給しても、親が尙充分なる生活費を獲得し得るならばよいけれども、斯くの如きは寧ろ少く、多くは子弟を教養するだけでも甚だ過重なる負擔となり、辛じて之を爲すか或は之をなす可能性を全く有たない人々も甚だ多いのであります。此の如く、經濟的に餘裕のない父兄が、子弟の學修のために少なからざる犠牲を拂つた場合に於ては、學業終了後の子弟に對して經濟的にも期待感を抱くことは一面無理からぬことであり、此のことから又、學校教育をば、就職の手段視する結果も導き出されるのではありますまいか。

勿論、筆者と雖も、右に叙べた様な、子弟に對する親の期待感従つて又、學校教育をば就職手段と考へることを正しいとて是認するものでは毛頭ありません。學校教育——否苟くも總べて教育たるものは——教育なる文字が示す如く、智識と人格とに就て教導、育成して行くべきものたることには疑

ひありません。唯如上の誤りたる思想は、單純なる謬見として一蹴し得る以上に、一層根本的な考察を要求するものであると思はるるのであります。そして、この根本的な考察の結果は、即ち筆者が曩に示した二つの原因となるのであります。故に此の誤れる一般觀念を、正しき方向に改めんとするに當つても、筆者が示した二個の原因に注目して爲されねばならないことを指摘せんと欲するのであります。

四

智識階級の失業問題及び就職難と職業選擇問題との關係に就て、末弘博士は、曩にも紹述致した通り智識階級の失業及び就職難の根本的原因は教育思想の根本的誤謬に在りと申されます。即ち從來の教育は、成功出世の手段と考へられ、之が今尙一般的思想となつて居るが、是甚だしき誤解であつて教育の本位は「人格の完成」に在ることを高調せらるるのであります。

教育を以て成功出世の手段となすこと、即ち一つの登龍門と看することの正しからぬことは言ふを俟ちませぬ。唯、博士の申される如く、此の謬想が、然かく有力に現存し、而も智識階級の失業及び就職難の根本的原因をなして居るものであるかに就ては、私として一考無きを得ないものであります。

明治の初年、歐風の教育制度が浸透し來り、之を享けた者が、社會的に大なる便宜を與へられた所

から、教育は恰も出世の豫備門の如くに考へられ、而して此の風習は永く社會に瀰漫して、今日も其の遺風の存在することは、或は是を認め得るでありませう。けれども、此の出世主義が現在博士の申される様に有力なものであるとは考へ得られないのであります。現在の學生を以て、等しく出世主義成功主義に動かれて居るものであると言ふ觀察は、明治時代の學生思想を、其のまま移して今日の學生に適用せんとするものではありませんまいか。それとも亦、學生の思想上の變遷を閉却して、明治の風習が、現在も其のまま玉條として遵奉せられて居るものとなすものではありますまいか。筆者をして言はしむれば、現在の學生には、博士の言はれる様な出世主義、成功主義は甚だ稀少であると斷言します。現在の學生は、最早夫れ程、夢幻的ではなくて、遙かに現實的となつて居ると觀るのが至當ではありますまいか。教育を出世成功の手段なりと考へる程、學生の思想は不易で且つ單純ではなからうと思ひます。

筆者に従へば、教育の現状は、出世、成功の手段とせられて居ると言はんよりも、職業獲得の手段とせられて居ると言はんを欲するのであります。即ち、單に成功とか出世とか言ふ如き莫然たる對象ではなくて、直に糊口の問題として切實に迫る「職業」が對象であります。だから、今日の教育は、假りに之をば、職業獲得主義に動かされつつある教育と申しても、さして過言ではないのであります。然乍、職業獲得主義による教育も、やはり教育をば「人格完成」以外のものへの手段となすことに

於ては、出世主義と撰ぶ所がありません。従つて之は教育の本義を誤つた邪道であり、擯斥すべきものであつて、博士の非難は其のまま加へ得らるのであります。唯、筆者の論旨は、博士が現在の學生をも、明治時代、殊に明治の初期のそれの如く、いつまでも「青雲の志」を擁いて、郷關を出づる様なものの如くに考へられるのに、同じ得ないことを明かにしたのであります。而して又、此の學生心理を描き出した點では、極く最近まで、學生々活に在つた筆者の方が、或は末弘博士よりも、一層妥當なる觀察を下し得たのではあるまいかと、秘かに自負するものであります。

五

轉じて智識階級の失業及び就職難と教育との關係に移ります。此の失業及び就職難が、博士の申される様に最も多く、教育思想の誤謬に基くものであると斷定することに對しては、私は遽かに首肯することの能きないものであります。

何となれば、誤れる教育思想が、就職難の最も根本的原因であるとするれば、之が改められた時には智識階級の失業及び就職難の大部分は除かれねばならないわけであります。けれども私には、教育思想と職業獲得とは、本來何等の關連も無い事柄であると思はれます。教育思想が改められたとしても經濟組織がヨリ多數の活動者を收容し得るのでなければ、就職難は依然として存在するのではありま

すまいか。

殊に、就學者の總べてが、學業終了後と雖も、父兄又は其他の擁護者から、恩恵を享けて生活し得る程の者ならば、經濟的問題はありません。然し、斯くの如きは、極く少數の恵まれたる子弟に限られます。多數の學生は、既に言及致した様に決して此の様な生活の安全地帯を有つてゐるものではありません。大多數の學業終了者は、校門を出た其の瞬間から、先づ糊口の資を求めねばならない状態に置かれてあります。若し、一定の學業を終了した者は、必ず一定の生活を保障せられるものとすれば、教育は怖らく、最も理想的に行はれ、各人は生活の脅威に競々たることなく、暢然たる態度を以て、所謂「人格完成」の實を擧げることが能きであらう。屢々繰返す如く、教育が就職の手段で無いことは之を認めるに吝かなるものではないけれども、萬人が顔回の如く、一簞の食、一瓢の飲、陋巷に在つて尙其の樂を改めざる底の悟界に引上げられない限り、就學者が就學の間、全く職業問題に煩らはされたいと言ふことは理想に止まると申さねばなりません。人が麵麩のみで生くるものではないことは、眞理たるに疑ありませんけれども、同時に人は、麵麩なくしては生くるものでないことも眞理であります。學業終了後、適當なる職業獲得の保障全く存在しない今日、或は假令職はあつても適當なる生活資料が得られぬとすれば、學校教育自身は、人格完成に立脚してなしたとしても就職難は、其のまま存在する筈であります。要するに筆者が言はんと欲することは、次の一點にあるので

す

教育思想を改めることが、直ちに就職難の消滅となることは考へられぬと言ふのであります。少し固苦るしく申せば、前者の思想的、觀念的領域が、直ちに後者の經濟組織的、現實的領域の改變者となり得ないと言ふのであります。斯く申せばとて、筆者が、思想と現實(實際)との密接なる關係を否定する者であるとして攻難されるのは不當であります。筆者は寧ろ、思想と現實との相關々係をば特に強く認めるものに外ならないのです。唯、吾々の問題に就いて見る時、特に教育思想と就職難とを因果的に考ふることに對して疑問を挾むものに過ぎないことを注意して欲しいのであります。

一つの假例を以て申します。茲に一個の青年があるとし、彼は豊かな藝術的天分を有つて居るため全生涯を擧げて、自己の長所の發輝に勉めやうと決心したと致します。彼の家庭も亦、彼の希望に對して正しい理解を有ち、其の目的を達成せしめるために、適當なる教養を與へやうとしたと致します。然るに、彼の家庭は資力の無いため、辛じて彼をば一定學校だけを了へさせ得て、それ以上は少しの經濟的援助をも與へ得ないと致します。斯くなれば、彼は、或る偶然なる幸運のために後援者を發見した場合の如きは別として、通常は、先づ生活の爲めに、時には本來の目的とは異なる職業を求めねばならないことも無いとは言はれません。そして、この状態が、大體に於て吾々が生存してゐる今日の状態であると申して差支へないと思ひます。職業撰擇なり、教養なりに關して正しい理解から之をなし

たとしても、その結果が常に必ずしも職業獲得の保障とはなり得ないのであります。

校内を一步外に出れば、何人も一粒の麥だに與へてくれない現在に於ては、就學者が就學中、既に就職問題に考慮を巡らすことは、一面餘りに當然のことではありますまいか。「何を食ひ、何を飲み、何を着んとて思ひ煩ふな」(馬太傳六ノ三) と言ふ基督の教への眞理も認められますけれども、同時に又「衣食足つて禮節を知る」てふ思想も考ふべき眞理を有つものであると信ずるのであります。

六

經濟學上の人口理論に於て、其の創始者たる榮譽を荷負ふて居るロバート、マルサスは、人口が食物よりも遙かに速かに増加しゆくこと、従つて之を、何等の制限なき状態に放任しておけば、人間の經濟社會が低落して行くことを教へました。つまり、人間は、一方に於て自由に結婚し、自由に生殖する權利をもつて居るが、他方には又、そのために饑餓に露らされる自由もあることを教へたものであります。若し生れ來たる者をすべて生存せしめやうとすれば、一定限度以上には出生することを禁じなければならぬ筈です。若し又出生の方を自由にしておくならば、出生する總べての生存を保障することが不可能となるのであります。此の關係は、移して學業終了者と職業との關係にも持つてくることが能きと思はれます。學業終了者は毎年——而も幾分増加し乍ら——多數に社會に送り出されま

す。世界戦争後、實業専門學校などは非常に増設せられたため、一層多數の學業終了者が出ることとなつて居る現狀です。然るに、職業は、之と同じ步調を以て收容力を増加して行くとは申されません殊に世界的不況以來は、經濟界が縮少し、その收容力を削減せられつつあるにも不拘、學業終了者は規則的に増加してゆくのであります。恰も人口と食物との如くであります。

それ故、若し學業終了者は常に職業獲得の保障が與へられるとするならば、先づ學校教育を享ける者の數を制限する必要があります。之に反して、教育は之を自由にするならば、總べての學業終了者が何れも直に職業を得ることは——殊に經濟界の不況なる場合には——困難となるは當然と思はるるのであります。

原則としては、學業終了者が増加し、従つて欲望が増加し、之が經濟組織を擴張してゆくこととなつて、人口と經濟組織とが相協調して行くべきでありますけれども、その調節が直に行はれることが困難であり、加ふるに他の種々なる外部的原因が之を妨げるのであります。

斯くて我々は、經濟組織の收容力が一方に於て大とならなければ、假令、教育の主義だけを改めても、就職難は依然存在するものであると觀なければならぬ立場に歸着したのであります。(完)

(附記) 引用した統計に就ては、北條、本田兩氏の配慮に預るゝと少なからず。茲に誌して謝意を表します。